松岡　完『ワールドカップの国際政治学』朝日選書，1994年より。
1994年6月17日開幕：欧州13，南米4，アフリカ3，アジア2，ｶﾘﾌﾞ・北中米2，の合計24ｶ国　「オリンピックと大リーグのワールドシリーズと高校野球を一緒にしたようなもの」。「大会中，出場国では軒なみ生産力が落ちる」
1993年現在，FIFA加盟国178ｶ国で5,200万人のサッカー選手が登録
○第１回ウルグアイ大会(1930年)
「サッカーは，植民地独自の歴史や文化を圧殺し，宗主国の優越を誇示し，政治経済面の支配を補強する役割」
Pax Britannica（イギリスの力によって維持される平和）と，帝国主義の海外膨張こそがサッカー隆盛の基礎を築いた。
日本：1873年，英国のｱｰﾁﾌｫｰﾙﾄﾞ・ﾀﾞｸﾞﾗｽ少佐が海軍兵学校（築地）にサッカーを持ち込む←「英国を模範に強力な海軍を創設しようとした明治政府の意向の反映」
1902年：日英同盟
1919年：イングランド・サッカー協会（ＦＡ）から日本に銀杯寄贈←「日英国際関係の親密化希望」の象徴。この銀杯を管理する組織として，1921年に大日本蹴球協会（現在の日本サッカー協会）
1904年：国際サッカー連盟設立（ＦＩＦＡ）（日本は1929年に加盟）
第１次大戦においてサッカーは国民の戦意高揚に貢献
「欧州から文化的・政治的に軽視されてきた南米は，欧州で隆盛を誇るサッカーでみずからの存在感を示すことに大きな意義を見いだした」
＊ルールの具体的な適用や審判の判定が欧州と南米でまったく噛み合わず。ボールの規格の違い。ウルグアイ優勝。アルゼンチンとは国交断絶に。
○第２回イタリア大会（1934年）
1929年からの世界恐慌の影響。独裁者ムッソリーニ。「（大会の目的は）ファシストスポーツの偉大さを見せつけること」。ドイツとの協力。大会ポスターはファシスト式敬礼をする選手。
アルゼンチン選手のイタリアへの帰化。
ファシズム体制下：スポーツで勝利をおさめる能力＝戦場で敵を打ち破る能力。フィールドの選手＝戦場の兵士。強力なサッカーチームは国家的財産。
「戦う機械」，国力示威の手段　＊２年後にはベルリンオリンピック（「ﾅﾁｽ･ﾄﾞｲﾂの国力と民族の優秀さを世界に誇示し，ﾄﾞｲﾂ国民の士気を鼓舞するために組織され，運営」
○第３回フランス大会（1938年）
開催国フランスと前回優勝国イタリアは予選を免除され，これが後の大会の先例となる。＊アジアからオランダ領東インドが出場。当時日本でも「蹴球精神と国民精神総動員」が叫ばれる。準決勝にブラジル進出。1939年9月　第２次大戦開始
「大戦中も，サッカーは労働者や軍人の娯楽と鍛錬の手段として脈々と生き続けていた。」
日本では野球やサッカーは敵国のスポーツとして迫害。
○第４回ブラジル大会（1950年）
冷戦の拡大。ソ連は東欧諸国に西側とのスポーツ交流を禁じる。
「スポーツは，社会の活力と国民の優秀さを誇示し，国外でのイメージを向上させ，影響力を増大させる重要な手だて」→1948年のソ連共産党中央委員会：スポーツをソ連外交の効果的な手段とし，各種大会で西側諸国を抑えて優勝することや世界記録を達成することを国家的目標に掲げた」
1949年：ﾄﾞｲﾂ連邦共和国（西独）とﾄﾞｲﾂ民主共和国（東独）の誕生
この大会でイングランドが初めて登場。ブラジルは世界最大，収容人員20万人のマラカナン・スタジアムを建設。ブラジル―ウルグアイ戦。
○第５回スイス大会（1954年）
1950年秋，日本は講和条約の締結や国連への加盟に先だって，東西ドイツとともにＦＩＦＡに復帰。
1953年：日本，初めてワールドカップ予選に出場。韓国と日本で争う（朝鮮戦争終結直後，韓国内の反日感情，正式な国交樹立なし）。韓国が代表に。
ハンガリーは初戦の韓国戦に９―０（ワールドカップ新記録の得点差）。韓国―トルコは０―７。
→欧州の強豪が出場できないことに対する批判生じる。
○第６回スウェーデン大会（1958年）
イングランド，スコットランド，ウェールズ，北アイルランドがそろって参加

17歳ﾍﾟﾚ初登場。当時はいっさい選手交代を認められなかった。ブラジル優勝。チームの帰国には大統領専用機が用意。→「芸術的ともいえるブラジルの攻撃サッカーが，もっぱら体力に頼り，守備的な欧州のサッカーにまさることを証明」→優勝はチーム・サッカーを支えてきた自分たちがいかに優れているかの証拠→ブラジルの黄金時代に。

○第７回チリ大会（1962）

革命を防ぐためのサッカーの国際試合の開催。中南米政府にとって国民の興奮をかきたてるサッカーは社会不安の鎮静剤＋権力維持の切り札。チリでは国防省がスポーツを管理。ソ連に優勝でもされたら国内で革命が起きるとの懸念。

宇宙とスポーツを舞台とするソ連の攻勢―米国，スポーツ分野への政府の支援。米国社会の活力と輝ける未来像を海外に印象づけようとした→オリンピックのメダル競争に集中。

「ﾌｯﾄﾎﾞｸｼﾝｸﾞ」：欧州と南米の対決。

ブラジル優勝。

○第８回イングランド大会（1966）

ワールドカップ盗まれるが犬が発見

ﾍﾟﾚ「ボールではなく，人間を蹴っとばそうとねらうｻｯｶｰｼｭｰｽﾞの目標となるのは，もうたくさんだ」

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が参加。この時のイタリア戦で今日にいたるまでアジア唯一の勝ち星。「イタリア・チームは極秘裏に深夜帰国したが，彼らは空港で腐ったトマトや卵の雨に出迎えられ，護衛つきで帰宅しなければならなかった。新聞には「恥辱」の大見出しが躍り，ﾌｱﾌﾞﾘ監督は即刻解任，１年間の謹慎処分を受けた。」

北朝鮮は準々決勝で３点先取したが結局ポルトガルに５―３で敗れる。

ポルトガルで30年以上続いたｻﾗｻﾞｰﾙ独裁政権の政策：３Ｆ→ﾌｧｰﾄﾞ（芸能における舞踊），ﾌｧﾃｨﾏ（宗教におけるキリスト教の聖地），ﾌｯﾃﾎﾞﾙ（スポーツにおけるサッカー）によって国民の政治への関心や現状への不満をそらす策。

○第９回メキシコ大会（1970）

２人までの選手交代の制度や，イエローカード（警告），レッドカード（退場）が導入。

ｶﾘﾌﾞ・北中予選でのｴﾙｻﾙﾊﾞﾄﾞﾙ対ﾎﾝｼﾞｭﾗｽ戦で３―２。その直後，ﾎﾝｼﾞｭﾗｽはｴﾙｻﾙﾊﾞﾄﾞﾙと　断交，攻撃を開始。ｴﾙｻﾙﾊﾞﾄﾞﾙもﾎﾝｼﾞｭﾗｽに侵攻。＝「サッカー戦争」

ｱﾊﾟﾙﾄﾍｲﾄ（人種隔離）体制とサッカー：白人と非白人は同じクラブに入れず。非白人が白人の試合を観戦することもダメ。南アは1991年にｱﾊﾟﾙﾄﾍｲﾄを撤廃，翌年ＦＩＦＡ復帰。

ブラジル優勝。３日間の騒ぎの死者は100人，負傷者は2,000人。→一時的に国民の関心を国内問題からそらす。軍事政権による要人誘拐，政治犯への拷問，先住民虐殺も棚上げ。大会直後，アマゾン横断高速道路建設計画の発表。→ブラジル・サッカーの世界制覇は政府の基盤維持にも貢献。（７億円といわれた準備費用の見返り）

○第１０回西独大会（1974）

大会直前，西ベルリン当局が２人の政治犯を釈放。

66カ国から33000人の報道関係者，試合中継テレビ局80，ラジオ局110，決勝戦は90カ国に生中継され８億人以上が観戦。

欧州以外からＦＩＦＡ会長が誕生（ブラジル人）。

国際スポーツの世界でも，台湾にかわって中国の参加を認める動きが急速に表面化

○第１１回アルゼンチン大会（1978）

軍事政権の人権抑圧を覆い隠し，政権延命の手段の側面→「莫大な債務を抱えながら，国家と民族の誇りをワールドカップの成功にかける政府は，スタジアム建設費の３分の２以上を支出したのをはじめ，大会のために４億5000万ﾄﾞﾙを投じた」（アルゼンチンの外貨準備高の約２割）→国家財政の圧迫，ワールドカップそのものがインフレに拍車をかけた。

○第１２回スペイン大会（1982）

フォークランド紛争―英国とアルゼンチンの対立

1982年4月：アルゼンチンがフォークランド諸島に侵攻。結局紛争は英国の勝利に。

「失意のアルゼンチン国民は，ワールドカップを舞台に屈辱を晴らしたい」

開幕戦のアルゼンチン―ベルギー戦を英国放送局はゴルフ中継に代える。

ブラジルが失ったＧＮＰは２億ﾄﾞﾙ。

○第１３回メキシコ大会(1986)

日本は韓国に東京で１―２，ソウルで０―１と連敗，惜しくも出場ならず。

韓国は1983年にプロサッカー導入，32年ぶりのワールドカップ出場。

韓国対アルゼンチンは１―３，対ブルガリア１―１，イタリア２―３。
韓国内の視聴率最高95％を記録
ソ連では1985年にゴルバチョフが登場＝ペレストロイカ，スポーツクラブは独立採算性へと移行
ﾏﾗﾄﾞｰﾅ活躍，得点王ﾘﾈｶｰ
西独からは首相のほか，閣僚や議員18人が空軍の特別機でメキシコに飛んだ。
○第１４回イタリア大会(1990)
決勝戦は１５億人（世界の３人に１人）が観戦。日本人の直接観戦者8000人。
南米予選での詐欺（ブラジル対チリ）。
カメルーンの活躍：選手に１人あたり700万円を超えるサービス（国民の平均月収は８万円）
1989年11月9日：ベルリンの壁が崩壊，6日後東独はウィーンでｵｰｽﾄﾘｱと予選最終戦を戦う（初めて敵地の試合でサポーターの声援を受けながら戦う。ｵｰｽﾄﾘｱは東独に入場券5,000枚を贈る）
東欧の民主化・自由化→ルーマニア（以前は選手はルーマニア国軍のクラブ，秘密警察が所属する内務省のクラブから構成。国際試合でも代表チームには秘密警察の役員がはりつき，選手の亡命を監視）。
1989年末：ﾁｬｳｼｪｽｸ政権崩壊
ワールドカップは西欧での高収入を望む選手にとっても，外貨獲得による財政立て直しのためのクラブやサッカー協会にとっても大切な宣伝の機会の場。
フーリガン対策：Ｆ組のシードとなったｲﾝｸﾞﾗﾝﾄﾞの試合会場はｻﾙﾃﾞｰﾆｱ島。
イタリア内務省は45,000人の警官を動員し，関係諸都市での酒類販売をいっさい禁止。
オランダ対ｲﾝｸﾞﾗﾝﾄﾞ戦には4,000人の警官を導入（逮捕されたｲﾝｸﾞﾗﾝﾄﾞﾌｧﾝは500人）
フーリガン横行の原因→既存の秩序への反抗，既成の価値観の崩壊，失業や将来への悲観，排外的な愛国主義，極右勢力の伸長（とくに他民族排斥を標榜するﾈｵ・ﾅﾁによる扇動など）。
ﾏﾗﾄﾞｰﾅ：1991年にｺｶｲﾝ服用疑惑（イタリア戦での勝利が原因）15カ月間の謹慎
西独のﾍﾞｯｹﾝﾊﾞｳｱｰはチームの主将として，さらに監督として優勝
欧州が決勝で南米を破ったのも初めて
1990年10月3日：東西ドイツ正式に統合。